

# 今、思うこと



## ■ 健康優良児だった



私は昭和四十一年八月二十九日に、父・堯、母・好江（平成八年死去）の三男として生まれました。丸々とした赤ちゃんらしい赤ちゃんだった、と聞かされています。健康優良児だったのでしょう。その証拠に、私が赤ちゃんの時、育児書の雑誌に、おむつ姿の私が紹介されているのです。

「じょうぶに育てる赤ちゃん体操と育児法」なんて書かれ、腕をのぼしたり、腕を上下にさせられたりしている写真です。

笹川ひろよしの公衆に対する初デビューといったところでしょうか。

世は高度成長期真っただ中、昭和元禄ともてはやされた時代です。

男ばかりの五人兄弟。

下四・五男は双子で、上二人下二人に挟まれ、いつも調整役であり、中間管理職のようなもの、何かハンバーグのレタスのような状態でした。

母のしつけは厳しかった。

「食事は好き嫌い言うな。出されたものは残さず食べなさい」。

我が家にとって、これは絶対の法律でした。

私は小さい頃、食は細く、食べるのが兄弟の中で一番遅く、よく母に迷惑をかけていました。

長いときは食べ終わるのに二時間位かかり、母は食べ終わるまで、文句も言わず付き合ってくれました。

お陰で、健康で（中学三カ年間精勤・高校三カ年間皆勤）好き嫌いがなく早飯で過ごしています。

家のルールは様々ですが、笹川家もご他聞にもれず、ありまして「うそをつくな！」「立つより返事！」「挨拶はきちんとしろ！」などがありました。

当たり前のことばかりですが、この当たり前のことがなかなか続かないものです。

ルールがあれば罰則もある訳で、愛のムチというか、叩かれる事は別に珍しい事ではありませんでした。

私にとって、一番の罰則の思い出は、丸坊主でした。

中学一年の時を最後に、三、四回は丸坊主になりました。

（マルコメ味噌のCMに出ていた子どもくらい可愛かったですけどね）。

今、思い出しても母と父は怖かったな・・・これは、率直な感想です。

兄弟それぞれ大なり小なり罰は受けた訳ですが、私だけ受けた極刑がありまして、理由は思い出せないので、あれは、小学五年生位の頃、近くの公園を、夜素っ裸走らされたんです。

私にとって、後にも先にもストーリーキングなんてこの時だけです。

この時は、二男の和弘が付き添いで走ってくれました。

やはり兄弟ですね。

心強かったですね。

しかし、途中で見知らぬ若夫婦が声を掛けてくれまして、「一緒に行って謝ってあげる」といって家に帰ったのですが、家に着いたら、若夫婦は、私たちの両親から子育ての話聞かされ、逆に説得され、感動して帰ってしまいました。

## ■ もったいない事はするな！

残された私は、子どもながらも罪を許されるかと思いましたが、さにあらず、頭を丸坊主にされ大泣きでした。

まだまだ叱られた思い出は、山のようにありますが、そうそう、祖父の良一からも一度大きな声で叱られました。

それは、ある正月のこと。

祖父宅に年賀の挨拶にお伺いし、食事を一緒にした時でした。

たまたま私が祖父の前に座って、食事をしていたのですが、突然祖父が大きな声で「何をもったいない事してるんだ！ばかもん」と。

指を指した先が私の皿で、海老の天ぶらを食べて、尻尾を残してあったのを見たからです。

「喝」の一声のように頭のとっぺんから雷が落ちた感じでした。

びっくりしました。

心臓が止まるかと思いました。

祖父の口癖は「もったいない事はするな！」でした。

今でも残さず食べています。

海老天の尻尾。

## ■ 教えてくれた水泳

笹川良一を師と仰ぐ、父・堯は、厳しい反面、スポーツが大好きな人間でした。子どもの頃の私は兄弟の中でもスポーツよりは読書の方が性に合っていました（本当の話ですよ）。

小さい頃はよくキャッチボールやサッカーなど教えてくれました。その分、顔などにボールが当たり、痛い思いをしました。ただ、今でも有り難く感じているのは水泳を教えてくれた事です。父がその時言った事は「万が一、みんなで溺れたら全員を助ける訳には行かないから一生懸命覚えなさい。私は母さんを助けるから」でありました。そのお陰で、小学六年の時の水泳大会に学校代表で出場することができました。とにかく、人並み以上に泳ぐ事が出来るようになり、親として子供に教える機械にも恵まれました。（ただ、そこまでにいくのには、かなりシゴカれました。デッキブラシで叩かれたり・・・）。

## ■ 悪い事と良い事のけじめ

今日、学校において教師による体罰や不始末、生徒による教師への暴力などの記事が毎日のように新聞紙上を賑わしています。

当時、私が通っていた中学、高校では先生からの平手打ち、尻ピンの罰は日常茶飯事でした。

今だったら新聞沙汰になっているのではないのでしょうか。

当時は、母をはじめPTAのご父兄のみなさんは「言って分からない子は一つや二つ張り飛ばせ」と諸先生方を励まし、はっぱをかけていたようで、どうりで先生がハッスルする訳ですよね。

でも、痛い思いをするのは私達生徒でしたが、先生を恨むような事は無かったです。

やはり、自分の方が悪い事と良い事のけじめを教えたかったのだと思います。

先生を尊敬し、信頼していたのでしょう。

父兄も子どもも。

今、振り返ってみると、厳しかった先生の方が記憶に残っています。

これからも教育の問題は試行錯誤が続くと思いますが、学ぶ安心に向けて全力で取り組んでいきます。

## ■ 食に感謝を

戦後、日本は、物質文明に翻弄され、学歴重視で推移しながら、社会構造が歪んでしまったような気がしますし、精神的修養もおろそかになってしまったのではないのでしょうか。

人は、誰一人、一人でなりたっているものでは、ありません。

健康に生まれ体は、両親や先祖の方々からの大切な贈り物であり、空気も自然も、人間の力ではどうにもならない、貴重な存在です。

そして、人はそれぞれによって生かされているわけです。

このことに気が着いた先人の知恵が、感謝することや誠実に生きる大切さ、謙虚さなどの精神文化を育てたものだと思います。

「おはよう」にしても、「あとかたづけ」にしても、「約束を守る」にしても家庭での「しつけ」は、社会の基本ルールでもあります。

哲学者で、教育者の森信三先生は次のように言っています。

「したいけど、してはならないことを絶対にさせないこと」がしつけの基本で公（おおやけ）の課題として「したくないけど、しなければならぬことを、絶対にさせる」ことで、しつけは完成する、と。

人間同士が助け合い、慈しみあい、ゆずりあうことで人と人の「間」に豊かなつながりが生まれるものです。親が、しつけにおいて「食べ物を粗末にしない」と教えてくれたのは、今でいう「食育」だったのかもしれない。

太陽の恵み、水の恵み、空気の恵み、大地の恵み、そして、その恵みを大切にしながら、農業にたずさわる皆様が働いて食物となり、人間の血となり、肉となる、そのことを考えれば、粗末にできない。

そこで、愛情を込めて料理をつくり、食事を通して親の愛情の伝達があるわけです。

だから、私をはじめ兄弟たちに、親は厳しかったのだと思います。

このことから見ても、食は人間社会の根幹であり、食を支える農政は政治の根幹をなすものです。

## ■ 政治家への興味・父の選挙



私は、学生時代から祖父や父の活動を身近で見してきました。

困難に直面している国、団体、人々の為に生涯を捧げてきた祖父、政治と経済は車の両輪という信念のもとに活動続ける父、二人の心の根底に流れるものはやはり「一人でも多くの人に幸せを感じて貰いたい」という願いだったと思います。

「物で榮えて、心で滅びる」社会になってはならないと、父は政治家を志しました。

が、それは決して平坦な道のりではなく、起伏の激しい長い道のりでした。

私が六歳の頃、昭和四十七年十二月の衆議院議員選挙に群馬二区から無所属で出馬しましたが、苦杯をなめました、その後、昭和五十二年の時は、自民党公認とされながらも諸事情により、出馬を辞退、昭和五十八年十二月の衆議院選挙は次点に泣きました。

政治を志して十五年目の昭和六十一年夏、父にとって、三度目の挑戦でした。

私は学生でありながら、父のもとにかけつけました。

選挙については、右も左もわからない私でした。

個別訪問で別の候補にばったり会ってしまって、心ならずも父のパンフレットを後ろに隠して、つい「がんばってください」と言って、このついでに握手までしてしまったこともありました。

失敗談は数知れませんが、今となっては、なつかしいものです。

(代議士の代わりに弔辞を読んだ時は、緊張いっばいに元氣よく読んでしまい、地元の役員さんに、もう少し悲しみを表して弔辞を読んだらと注意されたこともありました)。



## ■ 政治を学ぶ

父の初当選は耐えて、耐えて、耐え抜いての結果でした。  
初当選時代の国会見学記念の湯のみには、「忍耐」を揮毫しています。

私は父・笹川堯が初当選し、その後、地元の秘書として父の下で政治について勉強させていただきました。  
時は昭和の時代から平成の時代へと移り変わりました。  
バブルは崩壊し、政治や経済環境の「ウミ」が出始めた頃です。  
佐川急便疑惑をはじめ、住専処理問題が浮上しました。この問題は、約十三兆円にもおよぶ不良債権を抱えて、経済破綻した住宅金融専門会社（住専）の倒産処理を政府が公的資金の導入を決め、平成八年度に、六千八百五十億円もの巨費を計上したものです。

私は、バブルに踊って、勝手放題してきた民間企業に大切な血税を使うのか、怒りをおぼえました。  
どう考えても理不尽なことです。  
そのしわ寄せは、国民が負担することになるのです。  
このような政治体質を打破り、誰の目にもわかりやすく納得のゆく政治をしてもらいたいと思いました。

そんな折、小選挙区導入、新党結成ブームの中、二大政党制を目指す新しい力として新進党が結成されました。

私も「将来は子供たちのもの、お預かりしている美しいふるさとをより良くし次世代へ受け渡し、子供たちに大きな夢・希望を抱くことの出来る社会を創ろう」との思いで、自分が秘書として担当していた群馬新三区より、総選挙に立候補を決意しました。



## ■ 新進党公認へ



当時、新進党では公認候補の資格を得るためには小論文を提出し、他の公認候補予定者の前で五分程度のスピーチを行わなければなりませんでした。

全国各地から雄弁家や猛者が集まってきました。

いささか緊張しました。

その後、公認候補として認めてもらい、いざ選挙突入直前、当時の小沢一郎党首より激励・公認料受領の手続きがありました。

今でも思い出すのが顔に似合わず、小沢党首の手の柔らかさでした。

ふんわりしていました。

候補予定者として選挙区内（群馬三選挙区）を飛び回っている最中に阪神淡路大震災が起きました。早速党としても調査団を派遣致しましたが、私も地震発生から二週間位してから災害復興作業視察団に加わり現地に行きました。

視察は被災者並びに復興作業者の邪魔にならないように夜間に実施したのです。

高速道路の橋脚倒壊現場はまるで映画のセットのようでした。

液状化現象でマンフォールは浮き上がり、新幹線の橋脚などもボロボロでした。

あまりにも、凄まじい自然の力でした。

やはりまちの安全は中央だけで考えるものでなく、そこに住む人たちも真剣に考えなければならないし、常日頃より安全なまちづくりに向けての努力が必要であると思つづく思いました。

## ■ 初めての挑戦

平成八年の十月、第四十一回衆議院総選挙に新進党公認候補として、選挙を戦いました。私の初のチャレンジは、たくさんの皆様から御支援をいただき、四万一千四百五十二票獲得し、次点に終わりました。私一人の不徳のいたすところで、多くの皆様にご迷惑をかけてしまいました。その後、新進党の「たゆまざる改革・責任ある政治」とかかげた新進党の理念と現実に疑問をもち、離党を決意し、政治の原点にもどろうと考えたからです。

私が政治の世界にチャレンジした時から、「将来は子供たちのもの」「子供達が夢と希望を抱く事が出来ない社会はだめなんだ」との思いを持ち続け、今日まで活動しています。しかし、今日の社会において残念ながら多くの人たちが夢や希望よりも不安感の方が大きいのではないのでしょうか。治安・教育・育児・医療・環境などの問題がみなさんに大きくのしかかっているのが現状です。大人の思いは子供達の心にも多大な影響を与えます。

## ■ 妻との出会い



ここで、家内との出会いについて触れてみます。  
共通の友達を介しての出会いでした。  
私の母が平成八年二月、二年間の闘病生活の末、帰らぬ人となりました。  
五十八歳でした。  
その喪が明けてからの出会いでした。  
その年に総選挙があり、デートする間がなかったので、彼女の兄は青年会議所や太田商工会議所青年部での知人であったのです。  
彼女と妹共々座談会に参加して励ましてくれました。  
本当に彼女の家は親子兄弟仲良く、今振り返れば、私のような選挙に携わっている男に、よく嫁ぐことをご両親が許してくれた、と思います。家内のお陰です。  
今では一男二女の母親で、「ただ今子育て奮闘中です」。  
その毎日の努力にただただ頭が下がる重いです。  
有り難うございます。（皿洗いぐらいでご勘弁下さい）。  
【余聞録】（編集部より）

笹川ひろよしを支える妻・純美代（すみよ）さんは、子どもの出産に当たっては、県内第一号の臍帯血（さいたいけつ）提供者です。  
「少しでもお役に立ちたい」と決意したもの。

この臍帯血は、造血幹細胞液として活用される。  
これによって、難病性白血病、再生不良性貧血、先天性免疫不全症などに適している、といわれています。

昭和四十四年八月生まれ。  
茶道や編み物、ゴルフが趣味というが、現在は子育てに追われている。  
好きな言葉は「一期一会」。

純美代さん流子育て方針は「幼いうちから、して良いことと、悪いこと、善悪の基準を正しく教えたい。社会のルールやマナーをきちんとしななければならないと思っています。そして、親と子のスキンシップを大切にしたい」と語っています。

政治に対しては「打てば響くような政治に期待しています。  
高齢者と子どもたちが、互いに学び合い、語り合い、助け合える環境があればいいと思います」と話していました。  
（いだてん・平成十一年十四号より）

## ■ 子どもは国の宝

少子化という言葉をよく耳にします。

この問題は、今後の高齢化に伴う社会保障制度をはじめ、大都市圏以外の過疎化、国を支える人的要素、教育行政にかかわるさまざまな問題に連結していくものです。

大きな視点からみれば、国家存亡にもかかわる事柄であります。

「子どもは国の宝なり」。

この言葉の重みは古今東西、いつの時代にも変わらぬ重みのある言葉です。

さて、一億五十万人、千三百万人。

この数字は一体何かおわかりですか。

二〇五〇年の日本の人口と年少人口（〇歳から十四歳まで）です。

さらに、現役人口と呼ばれる十五歳から六十四歳までの数字は、全人口の五五％に減少すると推測されています。

この現象こそ、労働力の減少を生み、消費要素は低下、強大な国内市場は消滅し、それは今まで言われてきた経済大国から、小国へと進んでいく道。

早い話が国力というものが失っていくものです。

ここ数年の変化を見ても少子化が進んでいます。

一九九七年の合計特殊出生率（一人の女性が生涯に生む子どもの数）は一・三九人となり、減少しています。また、晩婚化傾向となり、主出産年齢の高齢化が進んでいます。

（二一〇〇年には人口の半分の六七四〇万人と推定される）。

こういった状況に歯止めをかけるには政治によるところが大きいと思います。

その一つが子育て支援であり、働く女性が増えることに対応する新しいシステムの早期の確立です。

政治的要因からすれば、男女平等の社会環境づくりといえます。

根本の問題は夫婦間の助け合いの必要性があげられます。

家事はどうしても女性に負うところが大きいものです。

これに子育てという大きな負担が女性にかせられる場合もあります。

わたし自身、父親として妻の負担を考えますと、ただ頭が下がる思いです。

母親となった女性の負担をいかに軽減していくか。

子育てに夢や希望をどのように持っていくのか。

女性のライフスタイルに合わせた支援も必要だと思います。

『厚生白書』でも「画一的・固定的な社会の状況が、家庭生活からゆとりと潤いを奪い、子育ての負担感を増し、若い世代に結婚や家庭に夢を持たなくさせている」ことが、少子化の要因としています。

## ■ 少子化対策



女性が社会進出する場合、勤労と育児を両立できるような社会環境をつくる必要があります。これらは、女性の皆様の声を聞かせていただきながら、進めなければならないと痛感しています。皆様もぜひ、この問題について考えてみてください。

家庭の問題が地域の問題に、また、日本の将来に大きく影響を及ぼしていくのです。

超高齢化時代と少子化問題は、どうしても大きな関係をもって、二十一世紀に大きく立ちはだかっている問題なのです。

いま、国も地方自治も少子化対策を打ち出していますが、財政問題もかかわり、保育制度の民営化など規制緩和の方向が進んでいます。

今こそ、地域から結婚や子育てのしやすい環境について、一緒に考えていく必要があります。

五十年後の日本社会は三人に一人が六十五歳以上という超高齢化社会になるといわれています。

その反面、少子化が進み〇歳から十四歳までの年少人口は減少しつづけています。

このバランスは六十五歳未満で、働き盛りの勤労者に負担が重くのしかかってきます。

行政としても、これまでの福祉行政では対応しきれなくなりました。

長寿社会は要介護者人口を生みます。

が、核家族や人口の都市集中で、独り暮らしのお年寄りも増加し、お年寄りのお世話をする人が少なくなってきました。

そういった背景で、公的介護保険が二〇〇六年四月からスタートを切りました。

これも、保険料を支払う人口があつてこそ成り立つものです。

現在の少子化対策を推進していかなければ、将来の勤労人口は減少するばかりであり、さらなる財政負担は免れません。

まして、公的負担は国が半分、都道府県ならびに地方自治体が半分となり、地域間格差も生じており、各地方自治体にとって大きな課題となっています。

これに対して、様々な対策を議論し施策を講じなければならなくなります。

私は、育てる安心へ誠心誠意取り組んでいきます。

## ■ 治安の大切さ

二〇〇一年十月、私が住む小舞木町を震撼させた事件が6号公園で、町内運動会開催中に起きました。今ではテレビや新聞で毎日のように殺人事件は報道されてはおりますが、こんなに身近で起きるなんて誰しもが創造だにしていまませんでした。

孫の手を引きトイレに連れて行ったおじいちゃんに襲い掛かった卑怯で残忍な犯行でした。

尊い祖父の命を奪い去った事件でありました。

災いの芽は私たちの傍に確実に忍び寄っています。

(実は三年位前に、朝方、私の後援会事務所に泥棒が侵入しました。ただ機械警備のお陰で人的にも金銭的にも被害はなく、ガラスを割って侵入したので物損のみの被害で終わりました)

このことから考えても、治安の強化はまさに最優先で取り組むべき課題であります。

暮らしの安全、しっかりと取り組んでまいります。

## ■ 選挙を通じて心の交流

これまでに色々な選挙を経験させてもらいました。  
選挙は、多くの人の心が交わり、候補者としても、支援してくださる皆様にとっても、そこにかかわった人たちの人生が交差します。

自分自身の選挙で流した悔し涙、父の選挙で今は無き母と共に砂利の上で土下座をし、流した涙、高校生の頃、父の落選を見て、帰京する車の中で流した涙、父の初当選で流した涙、お世話になった方の選挙で、必死にお願いの土下座をした時、十九歳の時、朝から晩まで右も左も分からない街を、知らない方との個別訪問、二分の挨拶が出来ずただひたすら下げ続けた頭、多くの人のうれし涙と悔し涙、ほとんど無言で行う落選後の事務所の後片付け・・・選挙は私にとってかけがえの無い機会を提供してくれた「人生大学」でした。  
心から感謝しております。

私は今までの政治や企業活動、社会運動を通して得た経験を生かし、問題に対して「逃げない、先送りはしない」と心に決めました。  
なにごとにも直球勝負で、活動していきたいと思っています。  
それは、だれもが笑顔あふれる個性豊かな元気なまちづくりをめざしているからです。

「政治の手本は今や地方にあり」といえます。国会としても、日々国民のために、と議論が行われていると思われませんが、皆さんの目にはどう映っていることでしょうか。

昔から「政治が乱れば、国も乱れ、国は滅びる」と言われます。現代の状況をみますと、教育現場は乱れ、凶悪犯罪の増加、失業・ニート問題等があります。

また、日本の経済を支えてきた中小企業にとっても依然として厳しい状況にありますし、食の安全も脅かされています。  
政治の責任は非常に重いのです。  
山積みする諸問題解決に向けて行動あるのみです。

## ■ 故郷太田への思い



一昨年の参院選挙以来、今後の政治活動について自分自身真剣に悩み考え、多くの皆様のご助言を頂きながら過ごして参りました。

「どうしたら故郷太田、お世話になった皆様への恩返しができるか」の自問自答の日々でした。

子供達が夢と希望を抱く事が出来れば私達も様々な夢と希望を抱く事が出来るのではないのでしょうか。

なぜなら子供が一番社会の中で弱者なのだから。

また、まちに夢と希望が満ちてくれば、そこに住む皆様に笑顔があふれてきます。

笑顔がまちの元気の素であります。

まちの元気が県の元気であり、そして国の元気につながります。

私に出来る事は、これまで活動してきた政治、企業活動、ボランティア、保護者会などを通して得た経験を生かし、不安感のない安心のまちづくりに取り組むことであります。

夢と希望あふれるまちづくりの大きな役割が、県政に存在するものと考えております。



## ■ 県政について

県政は、私たちが生活する上で、本来は近い存在です。  
(もっと近い存在にしなければなりません)。

市民の安全についての治安、教育、福祉、産業支援、地域づくりなど市単独ではできない問題に取り組んでいます。

今、県政に対する私の取り組みを述べさせていただきます。

一、暮らしに関しては治安の強化です。

警察官増強、効率的な再配置、街灯事業の充実・警察官、自衛官OBの積極的な活用です。

一、交通面では、アクセスと一般道交差点改良工事拡充です。

一、医療面では緊急医療センター建設です。(脳・心・小児科・・・とくに小児集中治療室の整備)

一、育児に関連しては、お母さん支援隊の創設です。(資格については県認定とする)

一、教育は「(仮称)中島ものづくり太田博物館」の開設です。

既存の建物を利用し、近代史を主としたものを展示するなど、郷土の歴史を探りながら、ふるさとに愛着をもてるようにします。

一、文化、スポーツに関連して、学校におけるクラブ活動への民間人登用の拡充を図ります。



一、東京との時間的距離を短縮する＝上毛エクスプレス。(旧妻沼線復活)

一、情報公開＝太田へ公文書図書館を誘致する。

一、群馬ブランドの育成(農工商)＝産学官共同研究事業の拡充。

一、好きなことば 「兼愛非攻」(多くの人を広く愛し、戦争を否とする)

## ■ 地方政治への思い

私、笹川博義は、このたび政治活動の力点を国政より地方政治に改め、県政にたずさわることを今後の目標として活動していくことを決意致しました。

今まで、ひたすら国政を志して参りましたが、町内会の行事や清掃活動、地域の一員としてボランティアに参加し、人との出会いと交流を通じて様々な角度から政治と人の生活とのかかわりを知ることができました。

これも今まで支え励ましてくださった皆様のおかげです。

少子高齢化、病院・医療などを巡り深刻な問題で困っている人がたくさんおられること、労働雇用・就職の厳しい状況、経済の課題、親の立場から安全に暮らせる治安の対策、食育の必要性、自然環境の取り巻く変化、輸入農作物・食品問題等を目の当たりにし、太田市に拠点を置き、自分たちの暮らす身近なところから「地域のお役に立ちたい」との思いが強くなりました。

改めて自分たちで支え合う地域社会の大切さを実生活で痛感しました。

数年前、「踊る大捜査線」という映画が話題になりました。

「事件は現場で起こってるんだ」というフレーズが印象的で、私は政治も同じことが言えると思いました。「政治は現場で起きているのだ」と。いくら机上で対策を練っても、現場の生の声と現実を直視しなければ、人の幸せのために、働くことなどできません。

これまでの思慮の足りない自分を反省し、暮らす人々に密着した地方政治に誠心誠意をもって励む心づもりであります。どうか意を察していただければ幸いです。

しかし、私・笹川ひろよしは新しく生まれ変わるためには、これまで支えてくださった皆様のお力がどうしても必要です。

まだまだ、至らぬ私ですが、更なるお力をおかしく下さい。暮らしの安心、育てる安心、学ぶ安心に向けて全力でやり抜きます。何卒、なお一層のご指導・ご支援の程、よろしく申し上げます。

ご一読頂き誠に有難うございました。

平成十八年十一月吉日  
笹川 博義